



文教住宅都市 習志野の

文化芸術の殿堂



▲ホール前の緑のプラザ

「すべての市民が自由に参加できる文化の広場を創造したい」と願って建設された文化ホール



1970（昭和45）年度から8カ年計画で進められていた「津田沼駅北口土地区画整理事業」。これと同時に進行していたもう一つのビッグプロジェクトが「南口開発事業」でした。

北口は230戸の建物のうち、150戸が移転するという大規模なもの。

南口は、駅前を習志野の表玄関として開発しようとするもので、文教施設、商業施設、住宅からなるもの。文化・商業面では市内だけでなく、総武線沿線の重要な拠点となるものを目ざしました。

習志野文化ホールはそういう意味でも画期的な、そして大いに期待される存在だったので、44年3カ月、文化ホールはその期待に応え続けるものでした。

大空の下で、人と建物と自然が

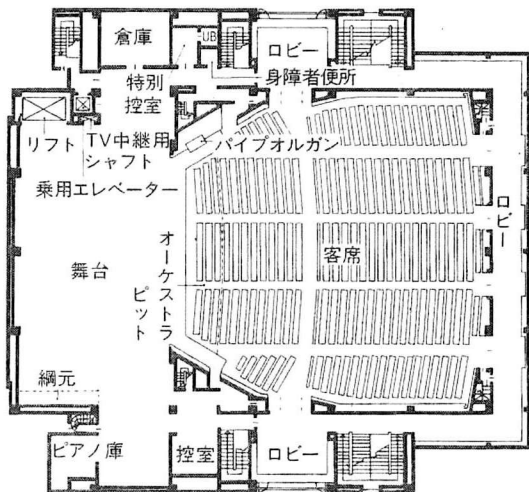
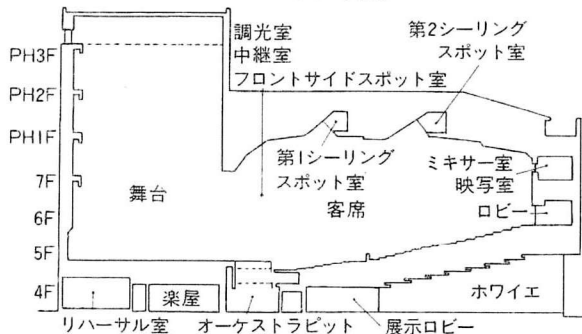
融和するような街の姿を夢に描いて

—— 当時設計を担当した鮎川一哉氏のことば ——

発展する習志野市のコミュニティ建設に、私共がその設計を担当することができ、感謝にたえません。

さらに、市民の皆さんの街づくりに対する情熱に、日頃より敬服しています。

文化ホール見取り図



私共は、習志野市の、街づくりの一翼を担うにあたり、大空の下で、人と建物と自然が融和するような街の姿を夢に描いてきました。

さて、文化ホールは、「サンペデック」の中心に位置する約一五〇〇名収容の多目的ホールで、①本格的なパイプオルガンも設置できるような音響に重点をおく ②音楽以外の催しものについても充実した内容にする ③公共建築物の姿として、心の通いあう場を思い浮べ、新しさの中にも手づくりの良さを出すなど習志野市の活発な文化活動にふさわしい期待を持つよう設計しました。

文化ホールが真に皆様のオアシスとして、文化の向上に意義ある存在となることを祈っています。

1978・1・1号より抜粋
（広報習志野）